

## フタなしタンク



帯広市医師会  
帯広市休日夜間急病センター 金澤 秀人

北海道医師会より、還暦の祝いに何か書いてくれとの依頼が来ました。まさかもうそんな年ですか！せっかくの機会をいただいたので、ここで少し過去現在、そして未来に思いをはせてみることにいたします。

ところで皆様は、この北海道医報をどのようなきっかけで手に取っておられるのでしょうか。多忙な診療のおり、ふと空いた時間になんとなく手に取った、そんなところかも知れません。このふとした流れでたまたま取った雑誌、たまたま出会った出来事、人、これが人生に思わぬ影響を与えたというご経験をお持ちではないでしょうか。思えば30年以上も前になります。

当時まだ23歳の青年盛りで、医師になる前の私は建築会社に勤めていました。今は倒産してなくなってしまいましたけど、80年代末のバブル景気がまだ残っていた時期、就職がすぐに決まって、それで入社してまだ1年たっていなかった私が、名古屋で建築予定の14階建てマンション工場の現場監督補助に任命されました。

もっとも任命されたといっても建築現場の知識や経験がないわけですから、やることといたら監督の脇で見習いをしながら、監督の指示に従って、ときには現場で働く職人のだれもやらないニッチの雑役作業をやるのです。たとえば固まってしまったコンクリートのはみ出した余分なところを削ったり、段取り悪くて資材置き場で邪魔になった足場板を何枚もヨッコしたり、それこそ日替わりでいろいろな雑務がありました。

このような慣れない建築現場の仕事だったので、数ヵ月たって5階ぐらいまで工事が進むと、もう胸をつくような高さになっているんです。この前まで何もなかった茶色の地面はすっかり消え、大きなコンクリートの塊と鉄骨が空高く伸びる。何も無いところにこんな立派な建造物ができる人の力に、あらためて感激したものでした。

ちょうどそんなころ、まだエレベーターが付いてないので、建築資材荷揚げのため、外壁に仮設リフトが取り付けられます。これが乗ってみると吹きさらしで、かなり揺れました。このリフト設置につれて監督補助の雑役作業内容も変わっていきます。そんなある日の朝でした。

「おい、お前ナ、今日はリフトでタンクおろせ」

脂の乗り切った30代後半、埃と土にまみれ現場ですっかり浅黒くなった総大将の監督登場。ケンカだ

って強そう。出勤してきた私にさっそく指示が飛びます。傍らで3年目の先輩がニヤニヤしながら見ています。

「タンクってなんですか？」「おしっこだ！」

見ていた先輩は笑いだすのをこらえながら、

「みんな通ってきた道だ、いいか、各階に簡易トイレあるだろ、中からタンクを出しておくから、リフトで下までおろすんだ。おいおいそんカオすんなよ、誰かやらなきゃ奴らあちこちでちゃうんだ」

これから何が待ち受けているのか、新人雑役作業員に知る由もありません。言われた通りにやるしかない。まあ殺されることはないだろうと、6階部分まで伸びた仮設リフト乗り場へ。

長さ2メートル幅80センチほどのカゴ状になったリフトへ乗り込んで登っていくと、まず3階で3個ばかりタンクを発見。これをかき集めてリフトへ乗せようと、一番遠くにあったものから始めてみる。するとおっと！30リットル入りで満杯となったそのタンクにフタがない。しかも大口。あたりを見渡したがどこにもフタはない。仕方ない、覚悟を決め重いタンクをよっこいしょと持つ。と、そのとたん、パシャパシャとしぶきがあがって作業ズボンがピシヤピシヤに。

この日は3階のほか、4・5各階それぞれ数個ずつフタなしタンクがあって、それぞれパシャパシャさせながらリフトへ。こうしてすべて積み終わるときにはすでにひざ下が、さらにリフトで地上まで降りたときにはその振動でもう腰あたりまで。服着たまま水遊びしてきた子どもと同じになって、この日の“ミッション”を終えました。

人生の転機とは、思わぬところでふと出会う。洗っても洗っても消えない臭いに、やっと目を覚ましたというか、はっきりと自覚したのです。ここは私の居場所じゃない。

人生どこかで間違ったかもしれないという漠然とした思いを持っていても、人はそれをどこかに押し込めて現状へ適応しようとする、そんな習性があるのかもしれませんが、ともすれば、うやむやにさえなってしまうその抑圧した思いを掘り起こし、それが何なのかははっきり意識させた出来事。さらに、このままではいけない、今本当にやりたいことを命をかけてやり通すのだと、決意を固めさせてくれた会社での日々。倒産してなくなったあの会社が残した、私への財産でした。

その後さらに何年か経って、医師になってからのことです。夜中に尿閉で患者さんが飛び込んできたとき、導尿をした手元がすべって、再び“おしっこ”を浴びました。目の前には、

「あー、すっきりした、先生ありがとう」と、安堵の表情を浮かべて感謝する患者さん。私の手や服は濡れてしまいましたが、そんなことより安堵した患者さんの姿を見てとてもうれしい思いで、そこに30年前の私はいませんでした。